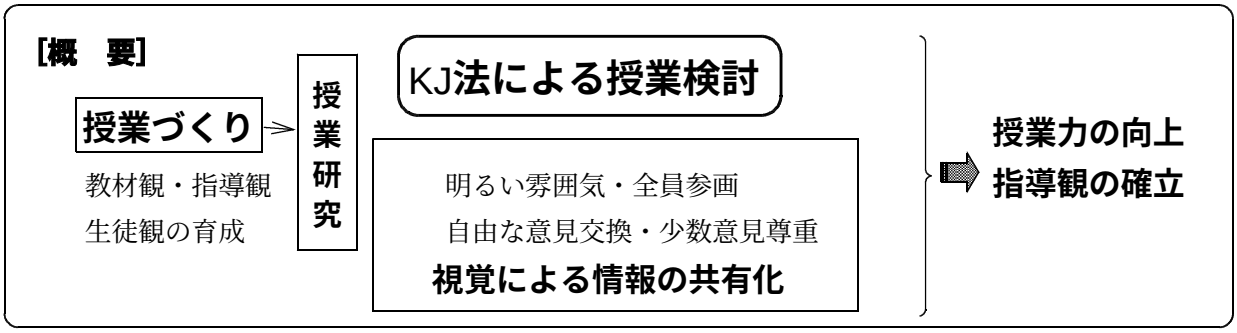
6　ＫＪ法を用いた全員参画による授業研究により、授業の質の向上をめざす研修を計画する



授業研究はお互いの授業の質の向上のための財産づくりととらえたい

教師にとって、授業の質の向上は求め続ける永遠の課題であり、私たち教師は、生徒の心に響く魅力ある授業づくりをめざして日々努力している。

しかしながら中学校においては、授業は教科担当に一任され、他教科の授業については踏み込んだ意見が出しにくい現状がある。このことから授業研究を行っても、内容が深まらないことも多い。また、授業研究の意義は認めつつも、特定の教員が発言するだけで、全員での協議とならない検討会になってしまうこともある。さらに、授業者にとっても、せっかく入念な準備をして授業を仕組んだにもかかわらず、感想に終始するだけで適切な評価をしてもらえないこともある。

本稿では、授業研究の授業検討をＫＪ法を活用して行い、全員参画型の研修を進める手だてについて紹介したい。

ＫＪ法を活用することで、多くの意見を集約し全員参加による授業研究を進めることができる

ＫＪ法は、文化人類学者の川喜多二郎氏が学術調のデータをまとめるために考案した発想法である。授業研究において、以下のようなＫＪ法の特色を生かして研修を進めたい。

- 視覚に訴えることで、全参加者が課題の共有を図ることができる。
- 自由な雰囲気の中で行うことで参加者の意識啓発ができ、協議への満足感が高まる。
- 自由なアイデアや発想を生かしやすい。
- 少数意見を尊重できる。

ＫＪ法の特色を踏まえ、活用するには各校の授業研究のねらいに応じた工夫が必要である

ＫＪ法を活用するには、授業研究においては各校の研修課題に応じてねらいを明確にすることが大切である。また、漠然と参加者から出た意見を集約するのではなく、以下のような工夫をすることが大切である。

- 事前に授業者の意図を理解しておく。
- 事前に授業分析の観点や役割を決めておく。
- 授業の感想や「良い」「悪い」の判断ではなく生徒の活動や動き、発表など客観的な事実を積み上げていく。必要に応じて付箋紙の色分けをしておくと視覚的にとらえやすい。
- グループ分けや見出しづくりを行う場合には研修部員や研究グループ長などをコーディネート役としておいた方がスムーズにいく。
- 多数で１つの事例を扱う場合には、５～１０名の小グループに分けて協議する。

１　授業研究での活用例１（学習過程に沿った例）

カードの代わりに付箋紙を用いる。指導案の学習過程を拡大した台紙を用意し、付箋紙を貼るようにする。

①授業前に授業参観者に付箋紙を配布する。

②参観者は授業中の気付いたことを１つの事例につき１枚の付箋紙に記入していく。その際できるだけ、主観を避け、事実を客観的に表現するようにする。

③授業後に参観者がお互いの付箋紙を台紙に貼り付けていく。（図１）

図１　台紙に付箋紙を貼っている様子

④お互いの付箋紙を読みながら、同じ内容や関連がある内容ごとに付箋紙を集めていく。その際どのグループにも属さない付箋紙はそのままにしておく。

⑤集めた小グループごとにその内容をまとめた見出しを付ける。（図２）

図２　グループ化の例

⑥見出しの意味を考えながら、他のグループとのつながりや関連を考え大グループをつくる。

⑦各グループ間の関係を図にしてまとめる。

⑧まとめと発表を行う。

２　授業研究での活用例２(対象別に再構成する例)

お互いの付箋紙を授業構想に基づいて貼り付けていく。例えば、教師の支援と生徒の活動を色分けすることによって、両者のつながりが明確になってくる。

また、生徒の思考の流れを対象別（人・もの・自分自身など）に沿って並び替えることで、授業の構想を視覚的に検討することができる。（図３）

図３　発表会の様子：お互いの意味付けを確認し合う

このように、研究授業のねらいに応じて、お互いの気付きを再構成することにより、様々な視点での検討やより内容のある研究協議が可能となる。

協働作業による広がりのある研修をすすめることにより、授業の質の向上をめざしていく

同じ授業を見ても、参観者の視点によってもその評価は様々である。ＫＪ法では全員のカード（付箋紙）に書き込んだ気付きが協議の出発点となる。お互いの気付きを確認し、グループづくりをする中から協働活動としての授業検討が行われていく。この視覚による情報の共有化という活動を通して、多様な見方、考え方に出会い、自分の指導観が確立されていく。こうした研修の積み重ねがお互いの授業づくりの財産となり、授業の質の向上につながっていくのである。

また、職員だけでなく、授業参観した他校の教職員にも参加していただくことで、広がりのある研修を進めることも可能である。さらに、ＫＪ法だけでなく、教師や生徒の授業評価を組み合わせることにより、より深まりのある授業検討もできるであろう。明るい雰囲気の中で、共に学び合い高め合う研修を積み重ねていきたいものである。

＜参考文献＞

川喜多二郎、『発想法』『続・発想法』、中公新書